

学科プログラム「親子のワークショップ」活動報告

廣瀬 敏史

(東海学院大学人間関係学部子ども発達学科)

要 約

平成 28 年度より大型商業施設 K タウン岐阜 (岐阜市柳津町) で行っている T 学院大学子ども発達学科プログラム『親子のワークショップ』についての活動報告を行う。本活動は「親と子が共に過ごせる創造的な場の創出」を第一の目的とし、年 4 回の表現系 (造形、身体表現、音楽・演劇) ワークショップを行っている。目的を達成する為に、子育て支援、学生の実践力の向上、大学の地域貢献、産学連携の 4 つの分野を包括的に関連させることを課題として掲げている。実施後のアンケート結果では、多くの参加者から活動内容に対して高い満足度を得られたこと、学生側もまた貴重な学びの場と感じていることが分かった。また大学と一般企業という産学連携の面からも、お互いの強みを生かした相互協力が成されていることが確認された。課題として、参加者がより活動に集中しやすい環境づくりや、運営面において更なる検討の必要があることが分かった。

キーワード：親子、ワークショップ、子育て支援、産学連携、地域貢献

1. はじめに

活動の目的と概要

T 学院大学子ども発達学科では、平成 28 年度より大型商業施設 K タウン岐阜 (岐阜市柳津町) 2 階「みんなの広場」にて、親子向けのワークショップを開催している。ワークショップとは、もともとは「作業場・工房」を意味する言葉であったが、現在は研修会や体験型講習会を指すことが多い。高橋 (2012)¹⁾によれば、ワークショップは「参加者自身が媒介 (メディア) に創造的に関わり、過程や結果を享受する」活動と定義される。つまり明確な到達地点に達することを目的とするのではなく、全体の方向性は共有しつつ、それぞれが自分独自の到達地点を見つけていくことが、高橋の言うワークショップである。そしてこの活動をナビゲートするのはティーチャー (教師) ではなく、ファシリテーター (促進者) である。大坪や三澤 (2009)²⁾によれば、ファシリテーターは「専門的知識を持ちながら、参加者とメディアの関わりの中から生まれた価値や見方を歓迎し、作品のオープンエンドな結果に導くガイドの役割」とされる。本活動ではこうした理念に基づき、主に K タウン岐阜に買い物に訪れた親子を対象にして、造形や音楽、体操といった表現系のワークショップを楽しんでもらっている。

我々の最大の目的は、活動を通して親と子が共に過ごせる創造的な「場」を創出することである。初年度である平成 28 年度は、年間 4 回のワークショップを計画している。ここではまずこれまでの活動の経緯やねらいを明らかにする。更に実践の詳細な報告と担当者による振り返りを行うとともに、アンケートや意識調査を元に活動全体を総括し、成果や今後の課題を明確にしたい。

まず本活動は、T 学院大学子ども発達学科教員と、学生有志による学外活動である。学科によって企画運営されているが授業としては位置付けておらず、あくまでボランティア活動の扱いである。メンバーは毎回子ども発達学科所属の専門教員 1~2 名と学生 10~12 名で構成される。活動内容は、主に授業で実践した内容を元に担当教員が提案し、それに学生がアレンジを加える形で行っている。授業ではないので学生の授業実践の場というよりは、教員と学生の協働 (コラボ) の場といえる。

親子を対象にした実践の機会としては、子ども発達学科ではこれまでも学内施設「あそびの森」や「東海絵本の森」での保育系の実践活動がある (川崎ら, 2016)³⁾。これらの実践は、事前に予約をした地域の親子を学内施設に招き、授業の枠内で行われる。一方『親子のワークショップ』は、学外の一般企業 (ショッピングモール)

学科プログラム「親子のワークショップ」活動報告

の敷地内に場所を借り、ほとんどゲリラ的にたまたまその場に居合わせた親子を対象にする。一応対象年齢は設定しているが、当日までどのような親子が何組集まるかは全く分からない。様々なケースを想定して活動に臨まねばならないことが、本ワークショップの大きな特徴である。

平成28年度は、5月に第1回目を開催し、8月に第2回目を開催した。いずれも造形系のワークショップであった。11月には第3回目を身体表現系で行った。平成29年3月に行う予定の4回目は、演劇系及び音楽系のワークショップを予定している。造形、身体表現、音楽、そして演劇という多彩なイベントを開催することで、子ども学を学ぶ学科の特徴や学びの実態、学生の姿を地域に発信出来るのではないかと考えている。

2. 本活動を通して取り組むべき課題

本活動の目標で掲げる創造とは、天才など特別な人が沈黙考してひらめくものでなく、誰しもが持つ能力である。場とは立場や興味を異にする人が集まりお互いにアイデアや価値観を共有する「流動的なネットワーク」を言う(野田, 2014) 4。こうした「創造的な場」を作り出すために本ワークショップでは、子育て支援や学生の

実践力の向上、大学の地域貢献、産学連携など様々な分野において課題を掲げている。

(1) 子育て支援

本ワークショップが担う子育て支援は、余暇支援である。創作体験を通して親子の絆を深め、学外、家庭外での時間を豊かで充実したものにしてほしい。

特に、タイトルに「親子の」という文言を入れ、親子での参加を呼びかけている。ここには親も可能な限り子どもと一緒に活動に加わってほしいという願いも同時に込められている。親が積極的に活動に関与することで、一緒に同じ時を過ごしているという一体感が子どもに生まれ、意欲が高まる。また、見せたいという気持ちから発想力や想像力が膨らむことが期待される。

その為にも、ワークショップで扱う材料や題材が、親の「自分もやってみたい」という気持ちを引き出すよう、工夫する事が重要である。具体的には、題材に汎用性を持たせることや、普段家ではなかなか扱うことが出来ない道具や材料・活動であること、発想の面でも新しい気付きや発見をもたらすものであること、などが挙げられる。

(2) 学生の実践力の向上

本ワークショップの特徴として、休日に家族と共に過

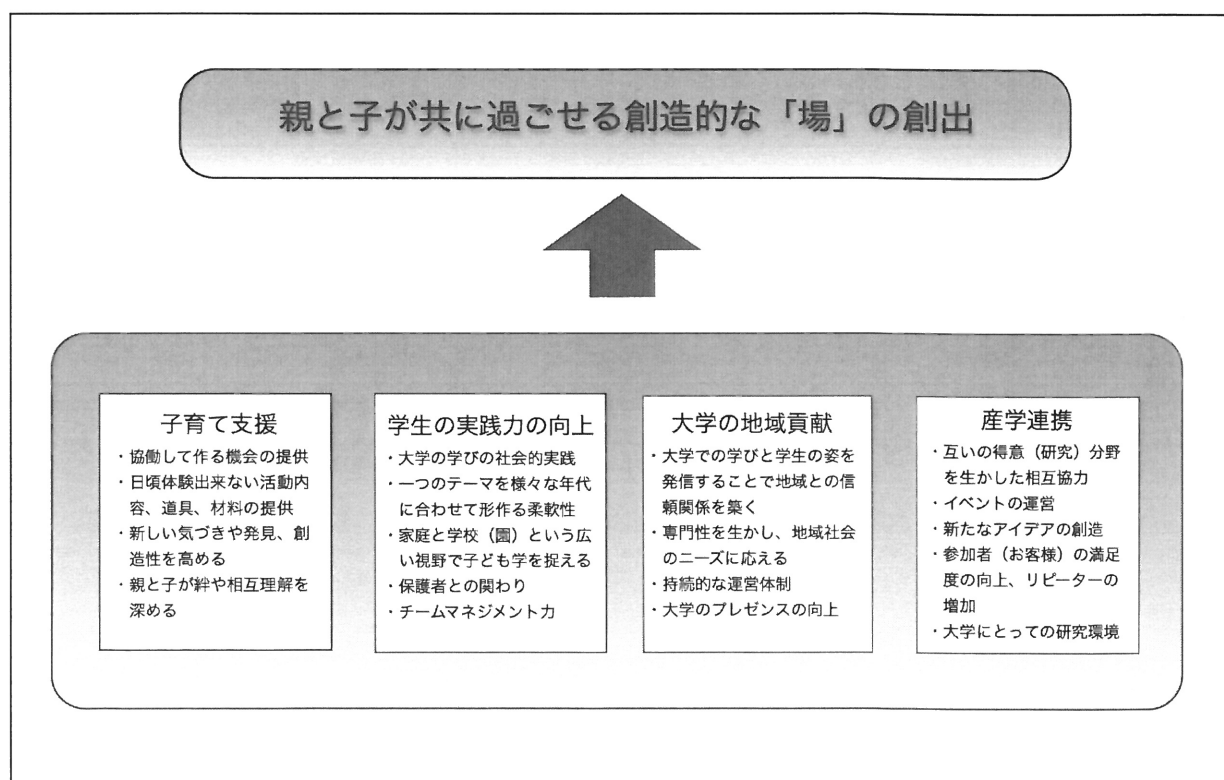


図1. 『親子のワークショップ』活動の体系

ごしているときの子どもに接することができる、という点が挙げられる。教員免許や保育士免許を取得する学生が日頃の学習を実践する場としては、3・4年次に行う各種の実習があるが、このように学外で親と過ごしている子どもの姿に接するという機会はそう多くはない。子どもの生活の大半は学校（または園・施設）か家庭で占められている。学校や園では見せない顔を、親と一緒にいるときは見せることもあるだろう。そういった子どもの色々な表情や心情に触れることこそが、大学に戻ったときの学びにも生かされてくるだろうし、それが学生の実践力の向上につながると思われる。

またワークショップにおけるファシリテーションの能力は、子どもと関わる職業に就くことを希望している学生には必要な能力であり、活動に参加する中で学生にぜひ身につけてもらいたい能力である。

（3）産学連携

本活動の更なる特徴として、一般企業とのコラボ企画であることが挙げられる。子育て支援の領域で、教育機関の大学と商業的活動を主とする企業とがコラボしてイベントを行うことは、意義深いことであると筆者自身は考えている。なぜなら子育てをしている保護者や子育てに関わる職種の人々は、全員が経済活動の中で生活をしており、もし子育て支援が一つの経済モデルになりうるなら、それは子育て環境の改善に繋がると考えるからである。これは、持続可能な社会を作っていく上で無視出来ない問題ではないだろうか。

（4）大学における地域貢献

最後に大学における地域貢献の問題がある。近年の社会の多様化、グローバル化の中で、大学には教育活動に加え知の拠点として社会で果たす役割が益々増大してきている。特に少子化の問題は地域経済だけでなく大学にとっても深刻な問題である。地域の一員としてこの問題に取り組むことで、地域社会の発展や大学の安定的な運営に貢献していきたい。日頃大学を支えて戴いている地元の方々に、学生の姿や大学の学びの様子を見ていただくことで、よりユニバーサルな存在として貢献していけたらと考えている。

3. 活動成果の検証

（1）検証の目的

活動全体の振り返りとアンケートの結果を相互分析し、成果と課題を明らかにする。

（2）検証対象

第1回・第2回・第3回ワークショップの詳細。（内第3回は担当者への聞き取り）。ワークショップ参加者39組のアンケート（1項目5件法と1項目の自由記述）。学生26名の意識調査（3項目5件法と4項目の自由記述）。Kタウン岐阜関係者への自由回答式アンケート（2項目の質問）。

（3）分析方法

以下の手順で分析を行うこととする。

①ワークショップの実施後の詳細、ポイントをまとめ、担当者による振り返りを行う。②参加者と学生アンケートの選択式回答をグラフ化する。③参加者と学生の自由記述から趣旨を推測して文章を簡素化する。④類似する内容をグループ化し、一覧表にまとめる。⑤グラフ化・表化されたアンケート結果とワークショップの詳細を比較検討し、活動の成果や強化が必要な分野を明確にする。

（4）アンケート調査の内容

参加者に対しては活動の満足度と全体の感想を尋ねた。学生には、志望動機、これまでどのように表現（造形）活動に接してきたか、参加したことの達成感とその理由、活動で良かったこと難しかったこと、実習とワークショップの違いを尋ねた。Kタウン岐阜関係者へは、子育て支援がどのように企業に好循環をもたらすかについてと、大学とのコラボレーションの意義を尋ねた。

（5）倫理的配慮

参加者のアンケートの記入及び写真撮影にあたっては、大学での学習指導や活動内容の充実に役立てるという目的を伝え、調査結果は研究のみに使用することを説明して了承を得た。また学生には、個人が特定されないこと、成績にも影響しないことを説明し、アンケートの協力を得た。

4. 実践活動「親子のワークショップ」

■第1回テーマ：『オリジナル色紙でつくる仕掛け絵』

■日時：平成28年5月21日（日）

第1部 AM10:30～AM11:40 第2部 PM1:30～PM2:40

■場所：Kタウン岐阜2階「みんなの広場」

■参加費：1組300円

■対象年齢：4歳以上

■参加者の数：第1部6組15名、第2部11組27名

■担当者：子ども発達学科造形美術教員（筆者）

■学生スタッフの数：12名（内4年生2名、3年生9名、1年生1名）



図2. 第1回ワークショップの様子

■内容：造形遊び（ローラー遊び、ヘラ遊び）でオリジナル色紙をつくった後、それをはさみで人型や動物の身体のパーツ毎の形に切り抜き、割りピンでパーツ同士を結合して動く絵をつくる。手や足、羽根を動かして遊んだ後、絵の裏側にマグネットをつけて全員の作品をホワイトボードにくっつけて大きな街を作る。

■活動のポイントと振り返り

この工作は大きく分けて前半のオートマチック(自動描画)技法による偶然性を楽しむ造形あそびと、後半の自らが作った色紙を切り抜いて形をつくり動かすという意図的な造形活動の2段階で構成されている。何気なく塗った色が、切り取る形によって蝶の羽根の模様が変わったり、芋虫の身体になったりするという体験を通し、つくりかえることの喜びや可能性を感じてもらいたい。また、絵をリベットによって可動させることで、自分なりのお話や性格付けが出来、想像力や作品への愛着が高まると期待している。活動の最後には、ホワイトボードに全員で作品をマグネットで貼りつけてもらった。他者との関わりをもつことで、コミュニケーション能力や豊かな感性が養われると考える。

活動の流れについて、60分という枠内で完成させることにまず苦慮した。十分な下準備と乾燥時間の短縮が必要であり、絵の具遊びでは極力水を使わないヘラ遊びとローラー遊びに絞った。また作るもののイメージがすぐに湧かない小さな子の為に、紙の裏にカニやウサギなどの下絵の線を書いておき、そこをはさみで切ってもらうことにした。こうした事前準備や活動内容を絞ったことで、全員が作品を完成させることができた。残念だったのは、ほとんどの子どもが下絵付きの画用紙を選んだ事で、結果的に多くの類似的な形が並ぶ結果となった。ただし絵の具遊びや形を切り出す作業で意図的に取り組む

姿が多くみられ、活動を限定する事で育まれる力や経験があることが分かった。

■第2回テーマ『木片でつくろう』

■日時：平成28年8月21日(日)

第1部 AM11:00～AM12:10 第2部 PM1:30～PM2:40

■場所：Kタウン岐阜2階「みんなの広場」

■参加費：1組300円

■対象年齢：4歳以上

■参加者の数：第1部6組17名、第2部17組40名

■担当者：子ども発達学科造形美術教員

■学生スタッフの数：12名(内4年生3名、3年生1名、2年生4名、1年生3名)

■内容：いろいろな形の木切れからつくりたいものを発想する。ボンドで形同士をくっつけた後、絵の具や小枝を使って装飾をして完成させる。

■活動のポイントと振り返り

この工作は幼年期における最も初歩的な木工工作である。小さなうちから木に慣れ親しむことで、自然を敬う心や生活を豊かにする木の有用性を感じ取ってもらいたい。造形的なねらいは、積み木遊びの延長で立体造形活動につなげていくことである。積む、つなげる、支えるなど、構造体として自立させるにはどうしたら良いかを考え、自分のイメージに合った形を見つけることが、思考力や判断力、空間認知能力を養う。また偶然の形からイメージを広げることで、着想や想像力が高まる。更に、ただ形をつくって終わるのではなく、そこに絵の具を塗ったり小枝で装飾を施したりすることで、ありふれた材料が「作品」に変わることを実感してもらいたい。

この工作は、作業自体は単純であるが、どのような形で材料と出合わせるかについては吟味が必要である。直



図3. 第2回ワークショップの様子

線的な木切ればかりでなく、曲線や有機的な形の木切れがあることでより自由な連想が生まれる。準備段階で、何人かの学生達に、意図的に無意味な形を糸鋸で切ってもらったのだが、当日、自分の切った木片が子どもに作品として使われるのを見て、学生たちはより活動に愛着を感じているようだった。

■第3回テーマ『親子でたいそう』

■日時：平成28年11月3日（木祝）

第1部 AM11:00～AM12:10 第2部 PM1:30～PM2:40

■場所：Kタウン岐阜2階「みんなの広場」

■参加費：無料

■対象年齢：4歳以上

■参加者の数：第1部10組22名、第2部6組17名

■担当者：子ども発達学科体育教員

■学生スタッフの数：8名（内4年生4名、3年生1名、2年生3名）

■内容：前半は親子で一緒になって出来る体づくり運動や表現運動を行う。後半はKタウン岐阜のテーマソングに合わせて踊ったり、ジャンケンゲームやレクリエーションゲームをしたりして楽しむ。

■活動のポイントと振り返り（*担当教員への聞き取りを元に筆者が作成）

幼児期から低学年までを対象とした「表現運動」や、親子で協力しながらの「体づくり運動」を基本とし、バランス運動・リズム運動・力試しの運動・体の動かし方を工夫する運動を通して、親と子が心と体を通じ合わせ、運動することの喜びや楽しさを全身で味わうことが主な目的である。本活動では特に親と子という組み合わせを念頭にプログラムを組み立てた。例えば親を丸太に例えて子が転がしてみたり、木に見立ててよじ上ったりと、遊び感覚で筋力や身体感覚を鍛えることを試みた。また参加した大人同士が手をつないで環を作り、中に入った子ども達が隙をみて外に出ようとする遊びなど、他者とのコミュニケーションや一体感、協調性を育む活動も取り入れた。

後半はKタウン岐阜のテーマソングに合わせた運動を行った。参加者が手にボンボンをつけて踊ると、場は一気に華やかな雰囲気になった。振り付けを覚えてもらった上で音楽に合わせて踊ることが理想であったが、すぐには覚えられない親子もいて、そうした親子は学生の動きを見ながら体を動かしてもらった。他の買い物客が見ている前でダンスをすることに抵抗を感じる親が少な

からずいて、のびのびと運動出来る環境の設定が課題として残った。



図4. 第三回ワークショップの様子

5. アンケート集計

参加者及び学生のアンケート集計を行う。参加者アンケートは活動直後、学生アンケートは活動を終えて概ね一ヶ月以内に行った。それぞれ選択式回答と自由記述式回答で答えてもらった。選択式回答はグラフ化し、自由記述式回答は、文章の主旨に基づき簡素化した後、同類をグループ分けする。尚参加者の自由記述についての集計は、造形系活動（1・2回）のみ行う。

◆参加者アンケート

○参加者アンケート有効回答組数36組（内第一回7組、第二回17組、第三回12組）

質問1：今回参加してみていかがでしたか？（選択式）

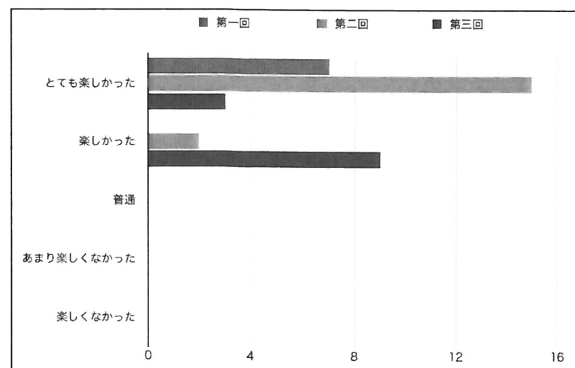


図4 参加者の満足度

質問2：活動への感想をお聞かせください（自由記述式、1・2回分）

学科プログラム「親子のワークショップ」活動報告

表 1. 参加者の意見・感想

自由記述の内容	数
つくるのが好き・上手く出来て楽しかった	13
学生さんがやさしく丁寧に教えてくれた	10
子供の創造力が高まる体験で良かった	3
子供が熱中して良かった	3
普段使うことのない道具や材料が使えて良かった	2
親子で楽しめた	2
難しかったが面白かった。	2
見本を置いてほしかった	1

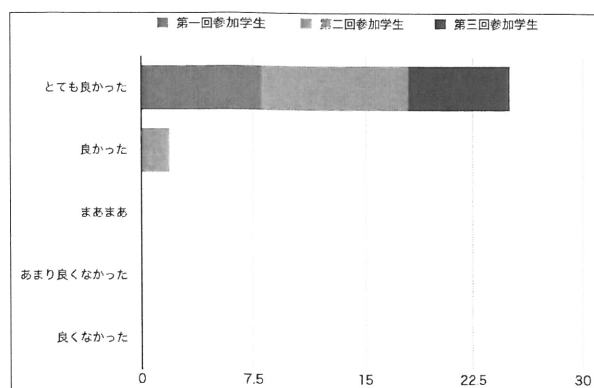


図 7. 参加学生の満足度

◆学生アンケート

○学生アンケート有効回答者数 25 名（内 1 回目 9 名、2 回目 10 名、3 回目 6 名）

質問 1: あなた自身これまでどのように造形（運動）系の表現活動に接してきましたか？（選択式）

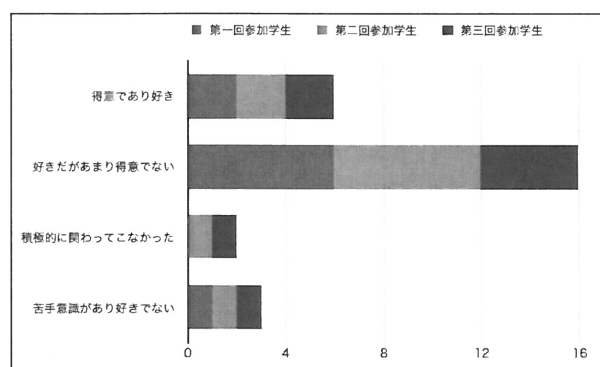


図 5 参加学生のこれまでの表現活動へ意識

質問 2: あなたがこの企画に参加しようと思ったきっかけは？

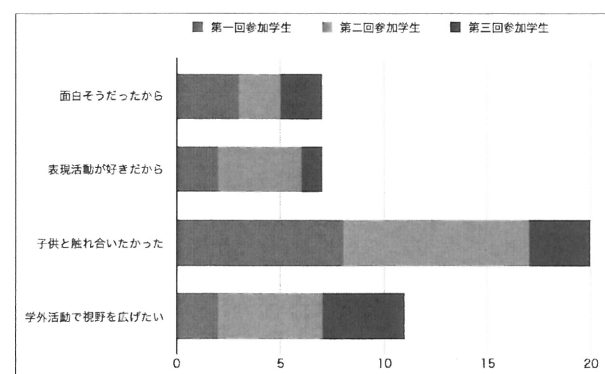


図 6. 活動に参加したきっかけ（参加学生）

質問 3: スタッフとして参加してみたいか？（選択式）

質問 4: 質問 3 でそう感じた理由（自由記述；1、2、3 回分）

表 2. 学生の感想（質問 3 に対して）

記述	数
子どもと関わってよかった(実践力の強化になった)	13
親子の楽しむ姿を見ることができてよかった	12
授業では学べないことが学べた	9
自分たちで活動を進められて力になった	4
子供の想像力に感動した	2
先輩のやり方から多くを学んだ	2
参加者の感想や感謝状から達成感を味わえた	1
ボランティアがしたかった	1

質問 5: 難しかった点や今後の課題は？

表 3. 今後の課題

記述	数
活動のポイントを分かりやすく言葉で伝えること	12
技術的補助・上手くいかない場合の対応、代替案	6
親への接し方・どうしたら親も楽しめるか	9
どこまで介入してよいか・気持ちの読み取り	5
突っ走り過ぎる子、遅い子、集中力がない子への対応	5
運営面（イレギュラー対応、集客）	5

質問 6: あなたが園や学校で行った実習体験と、今回の親子を対象にしたワークショップの違いについて教えて下さい

表 4. 学生が感じる実習とワークショップの違い

記述	数
親子で楽しく活動している姿が見られる	7
関係性の違い・先生と生徒（園児）という関係でない	5

ワークショップは子供が創造的でのびのびとしている	5
親の意欲が子供にも影響することが分かる	4
保護者と接点があてる	4
一人一人にじっくり教えやすい	2
先生の評価を気にしなくてよい・気持ち楽	2

◆親子の活動の形態

ワークショップに参加した親子がどのように活動に参加していたかを学生アンケートを元にまとめた。数値の信用性については、同じ親子を複数の学生が見て記述している可能性があり、多少の誤差があることが考えられる。あくまでも傾向を知る為の一参考資料とする。

- A. 子がメインで作り、親が少し手伝っていた
- B. 親と子が協力して一つの作品を作っていた
- C. 子が作り、親は手を出さず見ていた
- D. 親と子がそれぞれ作品を作っていた
- E. 親がメインで作っていた

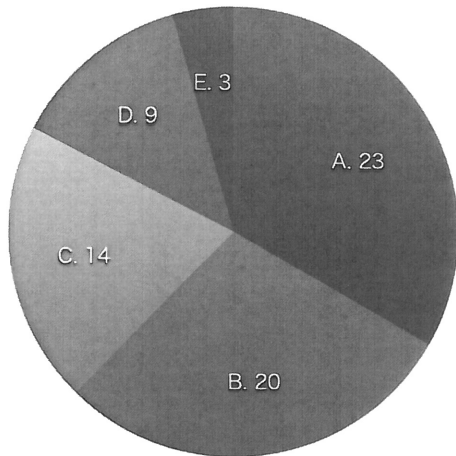


図 8. 親子の活動の形態 (参考資料)

◆K タウン岐阜関係者への質問 (自由記述式回答)

K タウン岐阜関係者に自由記述式の質問を E メールで依頼した。後日、K タウン岐阜の最高経営責任者である N 氏より書面にて回答をいただいた。以下、質問とその回答である。

質問 1: 子育て支援が企業にとってどのような好循環を生むとお考えですか?

N 氏の回答:

「K タウンはお客様の子育て環境の支援を通して、地域への子育て世帯の定着、流入の促進に寄与していきたいと考えている。『柳津にいてよかった』と思える子育てファミリーが当地域に増えれば、当然、地域は活性化する。地域密着の活動を目指す当施設にとっても将来的にプラスになると信じている。また施設としての存在意義や近隣商業施設との差別化という観点では、子育ての場

所を提供し親子の大切な記憶づくりに役立ちたいと思っている。K タウンで育ったお子様が成長の中で当施設を大事に思ってくれることを願うとともに、親の立場になったときもう一度戻って来てくれる、そんな場所であることを願っている。」

質問 2: 企業にとって大学とコラボすることの意義は?

N 氏の回答:

「企業活動の中で社会的意義があっても、実際には企業ゆえに取り組めないことが多くある。一般的には営利事業と認識されるため短期的な儲け話と取られるケースがあるからだ。子育て支援の分野の動静、取り組むべき方向性のあるべき姿についての情報収集は民間企業には限度があり、大学という公の機関が前面に立って関わってもらえることは大変ありがたい。また、自分たちの活動に新たな価値を付加してくれると感じている。」

7. 考察

活動の詳細と振り返り、各種アンケートの集計結果から考察を行う。図 1 で示した活動の体系に基づき分析する。

まず図 4 の参加者の活動に対する満足度では、全てのアンケート回答者が「とても楽しかった」か「楽しかった」を選び、満足度が高かったことが分かる。回答数に対しての割合では、3 回目のみ「とても楽しかった」が 25%、「楽しかった」が 75%と、他の回(第 1 回「とても楽しかった」100%、第 2 回「とても楽しかった」88%、「楽しかった」18%) よりもやや低い満足度になっているが、これは、活動内容に対する評価でなく、活動環境の問題による結果と思われる。特に 3 回目の後半のボンボンを使ったダンスでは、周りの買い物客の目が気になり、思い切って踊ることに躊躇する親の様子が見られた。パーテーションで囲ったり、閉じた空間で行ったりするなど、大人も子供も人目を気にせずのびのびと参加出来る環境づくりを考える必要があるだろう。

参加者が具体的にどのような点に満足を感じていたのかを、アンケートの自由記述から読み取ると、最も多かったのが、自由に創作活動が出来たこと、であった(13 件)。参加者の期待に対して、テーマの設定や難易度、材料や道具の選定が適切であったと考えられる。「難しい」との記述が 3 組あったが、「でも面白かった」と結ばれており、難しすぎない困難さであったことが伺える。また普段家庭では出来ないことが出来て良かったという感想

学科プログラム「親子のワークショップ」活動報告

や、創造性を高められる活動で良い、など題材自体への高評価も5件あった。

また回答で多かったのが、丁寧にやさしく教えてくれた学生への感謝の記述で10件あった。学生アンケートでは、活動を通して難しかったこととして「ポイントを言葉で説明するのが難しい」と答えた学生が最も多かったが、参加者は学生の教え方に概ね満足しているという結果が出た。これは造形活動自体への学生の潜在的な自信のなさ(図5参照)と、学生との交流が新鮮だった参加者とのギャップからくる結果と思われる。「参加者の感想や感謝状から達成感を味わうことが出来た」との記述があることや、図7の活動後の学生の満足度が極めて高いという結果から見ても、今後はこのような活動に参加することで自信を深め、実践力の向上に繋がることを期待出来る。

さて本活動の最も大きな特徴である「親子で楽しむ」という点は、全ての課題に横断的に関連してくる問題である。参加形態では参加者のおおよそ8割の親が活動に何らかの形で参加している(図8参照)。子どもの年齢にもよるが、活動の趣旨からすると、今後はCの「親と子がそれぞれの作品をつくっていた」(全体の約20%)がもう少し増えることが望ましい。親の姿勢が子供に大きく影響する、という気づきは学生アンケートにも多くあり、親の積極的な参加は本活動において重要課題の一つである。

学生アンケートでは更に、親と子が共に活動している場に居合わせることが出来て良かったという回答が多く見受けられた。授業や実習では学べないことが学べたという記述も多く、ワークショップへの参加が学生にとって貴重な体験であったことが伺い知れる。参加したきっかけを問う項目でも、「子どもと関わりたかった」に続いて「学外活動で視野を広げたい」を挙げる学生が12名いて、多くの学生が広い視野で子ども学を捉えることの重要性を実感出来たことは、大きな収穫と言える。

更なるポイントとしては、チームマネジメント力がある。本ワークショップでは、可能な限り異学年による混合チームを形成するよう呼びかけている。下級生は上級生から学び、上級生はチームをまとめることで力をつけていく。学生アンケートでは、表2で関連記述が6件ある。この6件は全て3回目に参加した学生で、3回目ではこの点に関して学生の達成感の高さが顕著に現れた。1回目と2回目の造形活動では学生が自ら活動を形作ったという感覚を得ることが少なかったようだ。今後はより

学生が主体となって準備段階から活動に参加することが望まれる。

学生の姿を発信することや大学の専門性を生かした実践を行うことは、「大学の地域貢献」の観点からも重要である。こうした活動を一過性にせず継続していくことで、より地域との信頼感が増すと考える。今回運営面においては、大きく2つの課題が浮かび上がった。一つは集客の問題である。定員の充足率は第1回午前37%午後67%、第2回午前42%午後100%、第3回午前110%午後85%で、2回目の午後と3回目の午前以外は定員を完全に満たすことはなかった。開催当日にKタウンを訪れた客が飛び入りで参加出来るように、事前予約は受け付けていない。広報活動は主にポスターとWeb、チラシ、そして当日の館内放送である。休日の午前は特に参加者が少なく、学生がチラシを配って呼び込みをすることが度々あった。今後は一定数の事前予約を受け付けたり、事前に近隣の幼稚園にチラシを配布したりするなど、対策が必要だろう。

もう一つは様々なイレギュラーのケースにどう対応するか、という問題である。参加年齢の幅広さからくる準備の煩雑さを初め、親子の形態も多様で、大きい子供が親無しで参加を希望するケースもあるし、かなり遅れて参加を希望する親子もいる。運動系のワークショップでは参加者の貴重品の管理という問題もある。このような場面の対応、リスクの管理の難しさについて、アンケートでは13名の学生が今後の課題として挙げた。活動を円滑に行っていく為にも、役割分担や安全管理、リスクや代替案などチーム内での共有を今後益々計る必要があるだろう。

「産学連携」については、まず筆者は一大学教員であり企業活動に関して全くの素人であることを断った上で、最高経営責任者であるN氏の回答を、筆者なりに読み取りたい。まず「子育て支援が企業にどのような好循環をもたらすか」という質問に関しては、大きく2つのポイントに要約できると思う。一つは子育て支援が人口増加につながり地域を発展させるという点。もう一つは顧客一人一人の思い出の場所となることと、生涯に渡って当該施設を大事に思ってもらいたいという点である。短期的でなく長い時間軸で企業経営を考える姿勢や、顧客にとって特別な場所でありたいという思いが文面から伝わってくる。

興味深いのは、N氏が質問2において「子育て支援の公共性」に触れていることである。「社会的意義」があり

ながらも、「営利事業」と思われるために「取り組めない」ことが、まさしく「子育て支援の分野」だという。これは、高い公共性を持つことが社会から求められる大学にはないジレンマである。だが逆を言えばこれは、公共性を求められながら、一方で安定的な学校経営が課題である今日の多くの大学の状況にも似通っていると言えるのではないだろうか。

子育て支援の分野に限らず、企業の持つ社会的経験値やダイナミズム（流動性）と、大学の持つ公共性や専門性は互いに密接につながっている。それぞれが相互協力し、情報交換し合うことで、そこに「新たな価値が付加」され、多方面で好循環を生み出していくことが可能となるだろう。

7. まとめ

平成28年度からKタウン岐阜（岐阜市柳津町）にてT学院大学子ども発達学科が行っている『親子のワークショップ』は、地域の親子がともに楽しめる創造的な「場」を提供する事を目的としている。と同時に「子育て支援」、「学生の実践力の向上」、「大学の地域貢献」、「産学連携」の4つの課題に取り組みながら、子ども学を包括的に捉える試みでもある。活動に参加した関係者のアンケートや質問から、様々な成果や課題が明らかになった。

まず活動を通じた満足度では、参加者も学生も概ね高い満足感を感じたことが分かった。内容に対する好評価の記述も多く、参加してくれた親子のニーズに内容が合致したことが伺え「子育て支援」と「地域貢献」という項目において一定の成果があったと言えよう。しかしながら回毎の参加者の反応を精査すると、場合によっては活動環境や内容の在り方を、参加者のニーズに更に寄り添ったものにしていく必要があることも分かった。また親の積極的な参加という点では、親自身の活動への参加を更に促していき、親も子どもと共に楽しめるワークショップを目指していきたい。

本ワークショップの喜ばしい成果として、多くの参加者が、学生との交流に好印象を感じたことが分かった。学生自身は、どのように援助促進をしてよいか戸惑いもあったようだが、一人一人の親子と濃密に関わる事が出来、授業や実習とは違う学びを体験することが出来たのではないかと。地域社会や家庭という大きな関わりの中で子ども学を捉えることが、学生の実践力を高めていくだろう。今後はより学生主体で活動を組み立てていけると考えている。

地域貢献という点では、学生のありのままの姿や、大学での学びの一端を見てもらったことで、地域の方々に大学をより身近に感じていただけたかと思う。これからも引き続き地元根付いた大学として地域の発展に貢献していきたい。

集客の仕方に関してはまだまだ課題があり、どのような形がベストか見つけられていない。今後十分な検討が必要な問題だが、筆者の個人的な感想では、基本的には現在のやり方のまま認知度を上げて、いずれあるべき姿に落ち着くことが良いと考えている。準備に関する困難はあっても、全ての人にオープンに開かれているという状況が、運営側の対応力・実践力を高めるだろうし、偶然の出会いを用意しておくことが、新たな参加者の広がりにつながると思うからである。

大型商業施設Kタウン岐阜との協力関係は、現在は表現系のワークショップを主としているが、3回目でテーマソングに合わせたダンスを考案したように、今後様々な展開があり得るかもしれない。いずれにせよ我々は自分たちの専門分野である保育・教育に軸足を置き、ワークショップに参加してくれた親子が楽しく創造的な時間を過ごすことに傾注していきたい。

本活動では、親と子、学生、教員、大学、一般企業、地域という異なる立場の人や集合体が、それぞれの役割と要望を持ちながら有機的に結びついている。その中でこの『親子のワークショップ』が全てを結びつけるバインダーの役割を担っていくことが出来るだろうか。その為にも今後多くの実践と知見を積み重ねて、この試みを更に発展的かつ継続的なものにしていきたいと考えている。

謝辞

本論文の作成にあたり、貴重な時間を割いてアンケートにお答えくださったカラフルタウン岐阜のプレジデント仁科正夫様、企画運営に協力して頂いたカラフルタウン岐阜運営部島田善敬様、並びにアンケートにご協力頂いた全ての皆様に心より感謝いたします。

引用文献

1. 高橋陽一 (2012)『造形ワークショップを支える：ファシリテーターの力』武蔵野美術大学出版局
2. 大坪圭輔+三澤一実/編 (2009)『美術教育の動向』p.244 武蔵野美術大学出版局

3. 川崎億子他 (2016) 『子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈11〉-平成 26 年度実施プログラム-』p.8
東海学院大学短期大学部紀要 第 42 号
4. 野田邦弘 (2014) 『文化政策の展開 アーツ・マネジメントと創造都市』p.179 学芸出版社

A Report on the Department Program 'Workshop for Parents and Children'

Toshifumi Hirose

Abstract

This report is about a series of four workshops intended for young children together with their parents that was launched in 2016 by the Tokai Gakuin University Growth Department, Kagamigahara, Japan. The workshops, which cover the four expressive areas of music, fine arts, bodily expression and theatre, are led and facilitated by Tokai Gakuin University students who are studying pedagogy. The workshops were held in Gifu's 'Colorful Town' shopping mall. The workshops are designed to provide a valuable public service for the Gifu community by enabling parents and children to engage with each other in creative, enjoyable and respectful opportunities. For Tokai Gakuin University students, the workshops enrich their learning by enabling connections with the Gifu community and collaboration with Colorful Town company. An evaluation of the students' perspectives on the workshop series shows that the students are satisfied with the workshops and their experiences of working closely with the Gifu community and Colorful Town company. The workshops showed as well, that all sides were satisfied, because they can take advantage from each other. Improvements planned for 2017 include the selection of a more convenient venue for all participants and enhanced promotion of the workshop series.

Keywords/ parent-child, workshop, child-care support, Regional Contribution
Company-academia collaboration